

ソナチネ作品にみるバイエル教則本との関係性とその分析

木村悠子 鈴木飛鳥 藤田裕佳子

要旨

今日、保育者養成課程において、古典派のソナチネ作品を音楽的に演奏できる技術レベルが一つの到達目標として置かれている場は多い。しかしながら、どの学校においてもピアノ指導を行う時間は限られており、その短い時間の中で、指導者は、いかに効率的に学生に習得させるかが問われている。

本論文では、三つのソナチネ作品を取り上げ、それらの作品を演奏する上で必要とされるテクニックを分析し、また、多くの教育現場で用いられる「バイエル教則本」の中では、どの曲でそれらの技術を学習できるかを考察した。分析の結果より、本論で取り上げた三つのソナチネ作品を演奏する上で必要なテクニックのほとんどは、バイエル教則本の中で習得できることが判明した。一方で、オクターブ、アルペジオなどの幼児の手に合わないテクニックは、バイエル教則本では取り上げられていないため、補充教材を準備することも必要であると考えられる。また、ピアノ指導者は、バイエル教則本のすべての番号をひたすら追って積み込ませるだけでなく、それぞれのソナチネ作品を弾くために必要なテクニックを含んだ課題を指導者が的確に判断し、より効率的に学生に習得させるということも必要とされるのではないだろうか。

今回の分析が、そのような指導の一助となれば幸いである。

キーワード：ソナチネアルバム、バイエル、ピアノ初学者

1. はじめに

今日、保育者や幼稚園教諭の養成課程、また幼稚園等保育の現場においても、古典派のソナチネ作品を音楽的に演奏できる技術レベルが一つの到達目標として置かれている場は多い。しかし、どの養成校においても個々の学生に対してピアノの指導を行う時間は決して余裕のあるものではないといえよう。さらにピアノ初学者の学生の中には、限られた時間の中で上記のような目標レベルに到達するまでに、極めて困難な道のりを感じる場合も少なくない。

本論は、そのような状況の下で、初学者の学生が古典派ソナチネ作品を弾くために身に付けるべき技術を、多くの教育現場で用いられている「バイエル教則本」の中からいかに掘り上げていくかを考えるものである。次項では特に初学者が取り組みやすい3つのソナチネ作品を取り上げて分析し、それらの曲を演奏するために必要な技術がバイエルのどの曲で学習できるものかを考察していきたい。

2. 分析と考察

【課題例1】

M. クレメンティ：ソナチネ Op.36 No.1 ハ長調 第一楽章

古典派ソナチネ作品の学習の導入として用いられることの多い M. クレメンティの Op.36 の中でも、その一曲目にあたるこちらの作品は、短い中にも堅実な構造と変化に富んだ楽想を持ち、初学者がより一歩進んだ表現力を学ぶための教材として大変有益である。

・演奏に必要なテクニックの分類

この曲は他の多くの古典派ソナチネ作品同様、多くの部分がスケールと分散和音の要素から成っている。

- (1) スケール：主調であるハ長調と属調であるト長調のスケールが登場する。いずれもバイエルピアノ教本では第65番及び第70番周辺の課題で学習することができる。バイエル学習時に、その後の取り組みを見据えて丁寧にスケール練習にとりくませることが望ましい。
- (2) 分散和音：旋律中に含まれているものと、伴奏部の音型(アルペルティバスなど)にあらわれるものとが登場する。初級～中級程度の学習者においては、分散和音の演奏に於いて和音としての観点を持つことができず、

一つ一つの音を独立したものとして演奏しがちだが、和声のまとまりを感じさせることで大きな音楽の流れを感じて演奏できることは勿論、正しい指使いの記憶やポジションによる記憶の定着の容易化も期待される。なお、アルベルティバス奏法の準備としては、バイエル第46番、55番、58番などの課題で学習することができるが、Cdur以外の属七和音の第一転回形がソナチネ以前の初歩教材に登場することは稀なため、補助教材などを使用することが望ましい。

以下、右手と左手それぞれの各部分についての分析とバイエルでの対応番号を、表にまとめる。

右手

三和音の基本形と第一転回形

小節	譜例	バイエル対応番号
【基本形】 第6, 16, 29小節		第57, 60, 66番など
【第二転回形】 第1, 2, 5, 24, 25, 17, 28小節		

指くぐしと指かぶせ(スケール)

小節	譜例	バイエル対応番号
指くぐし (スケール上行系) 第8, 10, 31, 33小節		第65番, ト長調の音階練習など
指かぶせ (スケール下行系) 第3, 26, 12-13, 18-19, 36-37小節		

オクターブ跳躍

小節	譜例	バイエル対応番号
第2, 9, 11, 17, 25, 32, 34小節		第80, 81番など ※譜例は80番終結部より

オクターブのトレモロ

小節	譜例	バイエル対応番号
第20-21小節		バイエルには含まれない要素

オクターブ和音のアルペジオ

小節	譜例	バイエル対応番号
第 12, 35 小節	第 12 小節 	バイエルには含まれない要素
補助教材の例：メヌエット BMW Anh. 116 (J. S. Bach)		
		

重音

小節	譜例	バイエル対応番号
第 30 小節		No.68, 70, 84 など 

左手

アルベルティバスの

小節	譜例	バイエル対応番号
第 9 小節		No.46, 58 など 
第 11 小節		
第 32 小節		
第 34 小節		

オクターブ和音のアルペジオ

小節	譜例	バイエル対応番号
第 15 小節		バイエルには含まれない要素 ※補助教材については右手と同様
第 38 小節		

・課題例1における考察

このソナチネは下一点は音から上三点ニ音までの3オクターブに渡る音域が使われており、この中には4つの「ド」が含まれている。そのため、初学者にはこの「4つのド」の位置を正確に理解し、楽譜上と鍵盤上の位置の確認を怠らせないことが必要である。この段階の準備として、バイエル61及び62番学習或いは復習も有効である。

また、ここで学ぶ重要な要素の中に「スラー」と「同音連続のスタッカート」がある。特に9小節目などに登場するオクターブ跳躍後の同音スタッカートは、初学者のほとんどがここで初めて出会うことになるので、いきいきとした音にするための「耳」を養うことにも着目されるべきである。

強弱・調整の対比を初期段階から意識することも、この作品の学習を通して行いたい。

【課題例2】

L.v. ベートーヴェン：2つのソナチネ Ahn.5 ト長調 第二楽章

この曲はテクニク的にみるとごく基本的であるが、内容的にはとても魅力的な小品である。40小節で演奏時間も1分15秒と短いため、保育科の、ピアノを始めて1年以内の学生が演奏するソナチネとして扱いやすい作品である。なおバイエル対応番号を選ぶにあたり、なるべく他の要素を含まない曲を選択した。

・演奏に必要なテクニクの種類

右手

①5音による基本形

テクニクを考えるうえで、構える手の形は重要である。大人の手の1から5指の幅は鍵盤の5度よりも広い。平面上に自然に乗せた手よりも小さく構える必要がある。指の付け根の部分の幅を変えず指を内側に丸め手の甲に高さを持たせることで、ちょうど5度の幅(10cm)のボールを持つような構えが基本の形となる。基本の形で演奏される部分を表にまとめた。

小節	譜例	バイエル対応番号
GAHCD		
1～3, 4～5, 5 7～8, 8～9, 13 14, 15, 30～31 34, 37, 38～39		33, 34, 39, 40, 61, 64
DEFisGA		
3～4, 9～10, 15～17, 20～21 33		75
CDEFG		
6		7, 8
AHCisDE		
11		79
EFisGAH		
3～4, 17, 32～33		無し

AHCDE		
18～19, 29～30 33～35		91
HCDEF		
35～36, 37～38		76

②連打音による指替え(手の位置の移動)

一つの鍵盤に指を集める時、鍵盤の幅(約2cm)の小さなものを持つように指を寄せ、弾き終わると同時に次の指に鍵盤の位置を譲るように上にあげ、次に打鍵するの指を下げ、連打を行う。この場合音名より指番号が重要である。

小節	指番号	音名	バイエル対応番号
3, 31	1 - 3	G	88
5	1 - 2 - 1	G	64
12, 13, 14	3 - 2 - 1	D	72, 73, 81, 90, 100
17	5 - 4	A	76
18	5 - 3	C	
30, 34	1 - 2	A	78, 81, 102
32～33	4 - 5	A	98, 106

③手の位置の移動

腕の横移動により手が移動する。上下の移動を少なくし、次の鍵盤に腕が緩い弧を描くように移動することを心掛ける。この曲では移動する音の間に8分休符があるか、移動前の音にスタカートが付いているため移動を容易にしている。また、移動途中の空中では次に打鍵する指が準備の形を整える。表中の移動の幅は、5音による基本の形が移動した音程を示している。

小節	移動の音と指使い	移動の幅(音程)	移動の助け	バイエル対応番号
4	A 4 ⇒ H 3	3度上	8分休符	62, 87
8	G 1 ⇒ A 4	3度下	8分休符	
12	A 3 ⇒ D 3	4度上	スタカート	
12～15	D 1 ⇒ H 3	5度下	連打音, スタカート	
13, 14	G 1 ⇒ D 3	3度上	スタカート	
33	D 1 ⇒ H 2	5度上	スタカート	

④指くぐし(スケール上行)

手首の高さを変えずに1の指先が3又は4の指の付け根の位置から手の内側で打鍵する。打鍵と同時に2の指から5の指全体が基本の形を崩さずに右側へ移動し、基本の形に戻る。

⑤指かぶせ(スケール下行)

手首の高さを変えずに1の指の打鍵と同時に1の指の上に2から5の指全体が左側に移動する。かぶせた指の打鍵と同時に1の指を左側に移動させ基本の形に戻る。

小節	譜例	調性	バイエル対応番号
5～7		G dur スケール	74
9		D dur スケール上行	79
10～11		A dur スケール下行	79
19～20		4の指くぐし・かぶせ	104

⑥指を広げる⑦指を寄せる

基本の形からレガートで指幅を広げる。この場合は手の形を保ちつつ音から音への意識を大切に感じる。半音階を含んで指を寄せるため、1と3の指が2度になる。2指が自然に黒鍵に乗る位置に1.3指を構える。

小節	譜例	特徴	バイエル対応番号
11, 17～18, 35		指の広げ	
21		半音階を含む寄せ	105

⑧重音・和音

打鍵する指のみ下げ、他の指を楽な状態に保つ。楽な状態とは、力んで指が伸びきった形で上げたり逆に指先を内側にまるめこまない状態のことである。下げた指の深さを揃えて同時に打鍵するよう注意する。打鍵する鍵盤内の位置により微妙に深さが異なるため、演奏者の手の大きさによって指それぞれの深さが変わるので、実際の鍵盤で打鍵した状態で止まり指の深さを確認する。また打鍵した直後の音を聴き、揃った重音と不揃いの重音を認識できるようにする。

小節	譜例	特徴	バイエル対応番号
40		6度の重音	74, 76

⑨装飾音

基本の形での速い動きとなる。古典であるため装飾音は拍に合わせて演奏する。

⑩スラー・スタカート・ポルタート

それぞれの奏法は、打鍵した後の指が鍵盤から離れるタイミングによって区別される。ピアノの仕組みや鍵盤の深さの音が出る位置と消える位置の違いを理解する。

①から⑩の奏法をもとに、8分の6拍子の拍子感を持ち、強弱を加えるとメロディーが完成する。

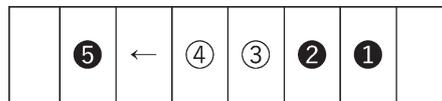
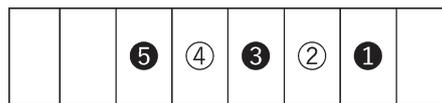
左手

左手はほとんどが和音の伴奏である。和音の進行に伴い手の形がどのように変化するかが重要である。基本の形から広げる指は一つまたは二つのことが多い。

《和音をつかむ手の形の移動について》

① 5の指の移動 5度(54321)→6度(5←4321)

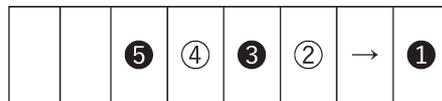
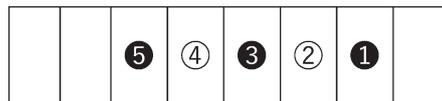
基本の形から5の指を左側に開き4と5の指を3度の幅に広げることにより、1と5の指が6度に広がる。属七の和音・第一転回に使われる。



*●は打鍵する指, ○は打鍵しない指

② 1の指の移動 5度(54321)→6度(5432→1)

基本の形から1の指を右側に開き1と2の指を3度の幅に広げることにより、1と5の指が6度に広がる。和音の第一転回, 第二転回に使われる。



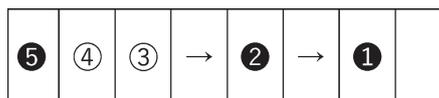
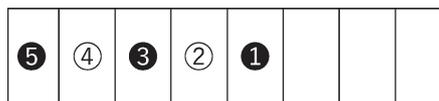
③ 8度を含む和音(543→(2)→→1)

無理のない範囲で指を広げる。指のみでなく手の甲, つけ根の部分から広げることが重要である。ただしこの曲に使用される8度は, 3と1の指の幅を6度に広げる。この時2の指は楽な位置に構える。



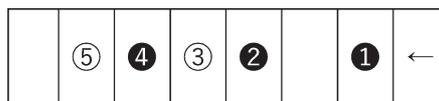
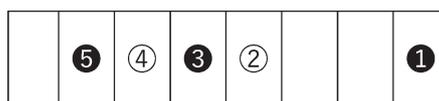
④ 7度の音程に広げる 5度(54321)→7度(543→2→1)

基本の形から広げる指が2か所ある。属七の和音・基本形に使われる。



⑤ 1の指の移動 7度(5432--1)→6度(5432←1)

7度の形から5432指の形を変えず1と2の指を3度の幅に狭めることにより、1と5の指が6度になる。基本形の和音の根音を4指でつかむ。

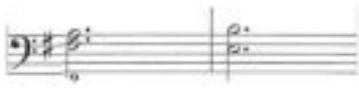


⑥ 二つの和音に共通音が無い場合

5-1または4-1指間の幅を縮めることで次の和音の最低音に移動し、その後その和音の手の形を形作る。

《和音のリズム変奏》

また和音の連続は次のようにリズム変奏されている。

和音のリズム	譜例	バイエル対応番号
基本の形		39, 18
バスと重音(スラー・スタカート)		76
バスの保持と重音		48, 49, 52, 57, 76, 88, 89
分散和音のスラー		52
重音の連続		90
アルペジオ		無し
重音のスラー		

両手による演奏

左右の手により二つのことを同時に注意しなければならないため、練習にかける回数が必要である。初学者の場合指幅の移動と手の移動に難しさを感じるようである。両手の演奏の中で、それらが出てくる手に注意を向けるようにする。

ただむやみに練習を繰り返すのではなく、それぞれの注意点がはっきりしているため、部分練習に取り組みやすく、結果的に短時間で練習の効果があがる。

・課題例 2 における考察

このソナチネに出てくるテクニックは、バイエルを学習することでそのほとんどを習得することができる。和音として、バイエルには属七の和音が少ない。また、バイエル後半では I → V の進行でバスを主音に保持することが多く左手 5 指の移動の練習が不足するが、バイエル前半の練習曲には 5 指を移動する曲が多くある。

以上の分析により、ソナチネ 5 番を演奏するための予備課題としてのバイエルは次の 19 曲となる。それぞれの曲でこのソナチネの予備練習として学習可能な課題をまとめた。

7 番 	右 5 指の基本位置の確認
	左 5 指の基本位置の確認
	両
18 番 <i>Allegretto</i> 	右 同じ指での連打音
	左 1 - 3 1 - 2 指による重音
	両 右手のレガートに注意
33 番 	右 Gdur の基本位置の確認
34 番 	左 Gdur の基本位置の確認
	両 連弾曲
39 番 	右 Gdur の基本位置の確認
40 番 	左
	両 左右の違う動き
52 番 	右 8 分の 6 拍子のリズムの習得
	左 分散和音の進行による手の移動
	両 左右の音量のバランス
62 番 	右 腕の移動
	左 和音の手の形, 腕の移動
	両 強弱記号

64 番		右	連打音による指替え
		左	1の指の動き
		両	cresc,
65 番		右	Cdur のスケール
		左	Cdur のスケール
		両	
72 番		右	連打音 指広げ
		左	Gdur の和音
		両	エコーによるフォルテとピアノ
75 番		右	黒鍵を含む基本位置
		左	Ddur の基本位置
		両	
76 番		右	連打音 6度の重音
		左	Gdur の重音
		両	エコーによるフォルテとピアノ
79 番		右	Adur の基本位置 2の指かぶせ
		左	
		両	
91 番		右	
		左	バス音の保持
		両	
99 番		右	複前打音
		左	
		両	
100 番		右	前打音
		左	バスの保持と重音
		両	

104 番		右	付点のリズム 4の指くぐし
		左	分散和音 7度を含む属七の和音
		両	スケール上行に cresc.
105 番		右	半音階を含む指寄せ
		左	バスの保持と重音
		両	フレーズ内の 

【課題例 3】

F. クーラウ：ソナチネ Op.20 No.1 ハ長調 第1楽章

「ソナチネアルバム第1巻」(全音楽譜出版社)の第1番に位置するこの作品は、様々なテクニックが連結されており、一段と難易度も高くなる。また、音楽的内容も充実しており、テクニック、音楽表現を学ぶうえで大変意義ある作品といえる。

・演奏に必要なテクニックの分類

第1－6小節：右手は、和音の分散形が旋律となっている。左手は、和音の分散による伴奏形になっているが、密集三和音の分散形が多く使われており、明確な和声感に基づいたものである。

これは、バイエル 57, 58, 60, 72, 74, 103 番で右手のこのような形を学ぶことができる。

左手は、バイエル 46, 55, 58, 94, 101, 103 番などで同じ音型が使われており、94 番の F-dur 以外は、調性も同じ C-dur になっているため、全く同じ音で構成されているところが見られる。

右手

小節	譜例	バイエル対応番号
第1小節－2小節	第1－2小節より	57, 58, 60, 72, 74, 103 番
第3小節－4小節		
第4小節－5小節		

左手

小節	譜例	バイエル対応番号
第1, 2, 3, 6小節	第1小節より	21, 31, 38, 46, 55, 58, 61, 73, 88, 94, 101, 103 番
第5小節		
第17, 20, 34, 38小節		
第18, 33, 35, 37小節		
第4小節 第19小節		94 番(F:属七の和音) 

第7, 8小節：和音の分散形に倚音が用いられ、より表情豊かな主題となっている。

第9-12小節：右手が1対2の単音と重音による和音の分散形となっている。これは、バイエル72番に同じ音型が出てくる。

小節	譜例	バイエル対応番号
第9小節-12小節		72番 

第13-16小節：右手に和音の分散形による3連符が現れるが、これは、バイエル66(C-dur), 74(G-dur), 85(F-dur)番で、このような音型が出てくる。左手は、オクターブで移行するが、バイエル教則本の中では、オクターブは取り上げられていない。

小節	譜例	バイエル対応番号
第13, 14小節 第15, 16小節		66, 74, 85番 

第17-20小節：右手に再び旋律が受け渡され、8度音程の跳躍が見られる。左手は、和音の分散による伴奏形になっているが、ここでは、冒頭と同様にバイエル55, 58, 61, 94, 103番などに同じ音型がみられる。ただ、ここではG-durに転調されており、バイエル61, 88番(G-dur)は、左手が同じ音によって構成されている。

小節	譜例	バイエル対応番号
第17小節		80, 81, 102番 

左手については、第1-6小節の項の表を参照されたい。

第24-29小節：右手に音階が出てくるが、バイエル第65, 83番が、類似した音型となっている。その他にも、81(A-dur), 83(C-dur), 88(G-dur), 91(a-moll), 99番(B-dur)なども、多様な形で音階が使用されている。

小節・拍	譜例	バイエル対応番号
第24小節-第29小節 (指くぐしあり)		76, 81, 82, 83, 88, 91, 93, 94, 96, 99, 101, 102, 104番 

第32-38小節：再び左手に和音の分散による伴奏形になっている。冒頭同様に明快な和声感に基づいたものである。(第1-6小節の項の「左手」表を参照)

第35-37小節：右手に同音連打が出てくる。バイエルでは、64, 72, 74, 81, 90番で連打音を学ぶことができる。

小節	譜例	バイエル対応番号
第2小節 第25・27小節 第35小節 第36小節 第37小節		64, 72, 74, 81, 90 番 

第39-40小節：右手が3度の重音になっている。バイエルでは、70, 84, 90番などに右手に3度の重音が出てくる。左手は、オクターブで移行する。

右手

小節	譜例	バイエル対応番号
第39小節-45小節		68, 70, 84, 90, 97 番 

左手

小節	譜例	バイエル対応番号
第13, 14小節 第15, 16小節		なし
第39, 40小節		なし

第41-45小節：右手が3度の重音，左手に音階が現れる。右手の重音は，バイエルでは，68, 70, 84, 90, 97に出てくる。左手は，音階の上行形になっている。バイエルでは，65, 83, 87, 101番などが対応している。

小節	譜例	バイエル対応番号
第41, 43小節 第42, 44, 45小節		62, 63, 65, 83, 87, 96, 101 

第46-49小節：右手が5音による定位置の移動で，上行していく。やがて，上行と下行を繰り返す，再現部へと繋がっていく。これは，バイエル62, 63, 86, 87, 91番などで同じ音型が現れる。

小節	譜例	バイエル対応番号
第46小節-48小節		62, 63, 76, 86, 87, 91 番 <i>Allegretto</i> 

・課題例3における考察

この作品で必要とされるテクニックは，和音の分散形，スケール，オクターブ，重音・和音，連打音，跳躍などである。そのほとんどのテクニックが，バイエル教則本の中で同じ音，または，類似した音型で出現しており，

この作品を演奏する上で、バイエル教則本の有益性は、分析結果から明らかである。ソナチネ op.20-1 第1楽章を演奏するにあたり、バイエル教則本の中で、より効率的に学ぶことが出来る対応番号は、次のように考えられる。

バイエル教則本	テクニックの分類
103 番	右手 和音の分散形(和音の分散形が旋律となっている。)
72 番	右手 和音の分散形(重音と単音の組み合わせ)
74 番	右手 和音の分散形(三連符による)
70 番	右手 重音
90 番	右手 連打音
83 番	右手 スケール上行形・下行形
81 番	右手 跳躍
62 番	右手 5音による定位置
55 番	左手 和音の分散形
76 番	左手 重音・和音
65 番	左手 スケール上行形

3. おわりに

〈バイエルピアノ教則本〉は幼少期における「ピアノの勉強の初めの2年間」を想定した教材となっている(序文より)。そのため、オクターブのアルペジオや跳躍など幼児の手に合わないテクニックはほとんど登場しないが、ここでとりあげたいいくつかの比較的難易度の低いソナチネ作品の中でも既にそのようなテクニックは登場する。そのため、時には補助教材を適宜準備することも必要であろう。

しかし、以上の分析で示したように、数少ない例外を除いては〈ソナチネアルバム〉に登場するテクニックのほとんどは〈バイエル〉の中で学べるものであり、保育者養成課程のような限られた時間の中でソナチネ作品を演奏するだけの技術を身に付けるための教材として、〈バイエル〉は効率的な予備課題である。

更には保育音楽の学習で目指すべきレベルの作品＝ソナチネ課題を弾くために必要なテクニックを含んだ課題をある程度精選し、それらを集中して身につけさせるという方法によって、レッスン内容の効率化を図るのみならず、学生の目的意識ひいては学習意欲を高めることも可能ではないだろうか。

今回の分析が、そのような指導の一助となれば幸いである。

参考文献

標準バイエルピアノ教則本(全音楽譜出版社)
 ソナチネアルバム1(全音楽譜出版社)
 ソナチネアルバム2(全音楽譜出版社)
 プレ・インベンション(全音楽譜出版社)